「那須岳」滑落者救助・確保の行動記録

（記録者：人見、服部、村岡、加藤）

山行者：人見邦明、服部美樹、村岡暖子、加藤秀夫

天候：曇り時々晴れ、強風。

滑落日時：2009 年 2 月 8 日　午前１０時３０分頃

滑落場所：森林限界を過ぎて４０～５０m 先、指導標と花の案内・ルート看板、地形図の 1,678m手前付近。

登山道は約 10mの幅でロープが張られて、谷側のロープから 20mほどのゆるい下り傾斜先約 10mの崖下に滑落。

どの辺を歩行していたかは不明（ロープ内か、外か)。

滑落者：早稲田大学 Wandervogel 部 OB 会パーティ３人のうちの１名（６５歳、男性)。

協力パーティ：西朋登高会パーティ３人

行動概要：

９：２０

・大丸駐車場出発、薄日は射すも嵐のような強風。

１０：０５

・指導センター

１０：４０

①滑落者パーティと遭遇

②森林限界を過ぎて４０～５０m 先、早稲田大学 Wandervogel 部 OB 会だというクリハラ氏からたったいま３人パーティの内の１名が滑落したとの報告。１０：３０頃か。

③早大 WV部 OB 会クリハラ氏は待機、山本氏は滑落者カワサキ氏を崖上付近で確認中とのこと。

④人見は様子を見るため山本氏のいる崖上に移動する。

⑤服部、村岡、加藤はいったん待機するが、加藤、村岡は加藤の先に行こうとの合図で登り始める。数歩行ったところで、服部から人見が戻るのを待ったほうがよいとの意見があり、戻り待機する。

⑥加藤・村岡の行動

人見が様子を見に移動した際の「風の隙をついて先に進め」との指示に従ったため。避難小屋を目指せという意味と勘違いをした。

⑦朝日岳某壁登攀を強風撤退の西朋登高会パーティ３人が下山してくる。

⑧服部、西朋登高会パーティ状況を説明。

⑨人見、山本氏のいる所付近で、滑落者（カワサキ氏、６５歳）を発見した後、北稜隊に戻って、「滑落者がいるのでわが隊の行動を停止して救助活動に当たる」と指示。

（メモ：加藤記）

登攀用具

補助ザイル

8mm×１０m

環ビナ、カラビナ

シュリンゲ

加藤の行動は大問題。

服部の好判断。

⑩早大 WV部 OB 会２名、当会４名、西朋登高会３名、合計９名で役割分担と対策協議。

⑪リーダーを決めようと提案したのは西朋登高会の１人（ヒゲ)。そこから役割分担等が一気に進んだ。

⑫人見が司令塔となり役割分担。確保、救護班は登攀用具を持っている西朋登高会３名と人見、早大 WV部 OB 会山本氏の 5 名。前線連絡班は服部、村岡の２名、指導センターまで下山し待機。中間連絡班は加藤、早大 WV部 OB 会クリハラ氏の２名、遭遇地点で待機。

リーダーを決める

人見が役割分担を明確にしたことが行動をスムーズにさせる。

１１：００頃

①119 に携帯より連絡する。この際に、滑落者の年齢、性別、意識があること、現在地を伝える。が、先方はあまり理解できていなかった様子。この時、強風のため何度も電話が切れ、何度もかけなおしをした。このとき、白河(福島県)に入電したため、こちらから那須岳の管轄の黒磯(栃木県)に連絡をしてくれるとの報告を受けた。

②一通り、話をして、準備が出来次第、携帯に連絡をくれることとなったため、村岡と一緒に指導センターまで下ることにした。

③村岡携帯を使用したが、この際服部携帯の番号も伝えた。
電波が悪く一方が不通になることがあり、また村岡携帯は 15 時頃電池切れとなったため、２台使用できたのは服部の好判断だった。

④指導センターまで降りる際、早大 WV部 OB 会の登山計画書をもらった。

救助要請は 110 番

滑落内容の伝達

ドコモ使えず、au は OK。

連絡先の複数化

（救助活動）

①チーム総隊長を山本氏に選出。山本、人見、西朋登高３名が現地付近に行く。

②山本氏にはなるべく滑落者カワサキに近いところにいて声をかけ続けるように頼む。

③西朋登高会若手が支点を作り、懸垂で下りる。西朋登高会ヒゲが次ぎに下りる。けが人に二人が近づき確保する。その時人見滑落。無傷だったのでそのままけが人の介抱作業に加わる。けが人を岩陰に移動。もう一人の西朋の年長者が懸垂で下りる。西朋登高会若手とヒゲはルート偵察へ。人見はけが人のザックを拾ってくる。西朋登高会年長者・人見を残して二人はその場を離れる。西朋登高会年長者のツエルト張り、西朋登高会若手とヒゲの二人が残していったガスで暖をとりつつ、タバコをけが人に吸わせながらひたすら救助隊を待つ。

④崖下にいた人見も年長者も連絡手段がないので、上にいる人たちの様子は何も分からない。

人見滑落

滑落者の安全・保温の確保と安心感。

１１：４０頃

①指導センター到着後、前線の連絡隊として、指導センターまで下りたことを黒磯の救急へ報告。服部、村岡が下山中に何度か携帯に黒磯の救急より電話があ

ったため、直接の連絡先がわかった。

１２：００頃

①那須岳所轄の警察より携帯に連絡あり。
現在、救助隊を要請し、編隊中なのでしばらく指導センターで待機をしていてほしい、との依頼を受け、ＯＫする。

１２：３０頃

①救助隊の隊長より連絡あり。現在、大丸の駐車場に向け出発をしているので、もうしばらくの間、指導センターにて待機を依頼される。
②また、この際に滑落者を動かさないで欲しいとの依頼を受けたので、その旨を上にいる加藤へ携帯で連絡する。
③加藤、上記②の要請は、滑落現場又は、近くに行くことができないため聞き置くだけにした。

滑落者の安全確保を優先

１２：４０頃か

①西朋登高会の２名：ヒゲと若手が中間連絡班に戻る。加藤は救助隊が出発したことを西朋登高会の２名に告げる。西朋登高会の２名のうちのヒゲが、救助隊のルートが登山道か林道か不明であるので、中間連絡班は森林限界地点の分岐点まで下山し、待機との指示あり。
②中間連絡班に西朋登高会の若手１名が加わり、斜面に穴を掘り加藤のツエルトを被せ３名でビバーク。

強風、防寒対策

１３：４４

・上にいる加藤より連絡あり、救助隊と直接確認したいことがあるということなので、救助隊より連絡が欲しいとの依頼を受け、救助隊の方へ加藤の携帯番号を伝え、連絡してもらう。

１４：１６

・救助隊から加藤に連絡が入り、滑落場所を報告。救助隊は先発として４名、警察３名が林道を登ることを確認。

１４：３０頃

①救助隊の第一班が指導センターに到着。
②滑落場所の確認と加藤が把握している情報を伝える。
地図より、峰の茶屋跡付近と説明した（が、実際はもう少し下。これが、先発隊が先まで行ってしまった原因。）
③その後、続々と救助隊の方が指導センターに集まってくる。
（この時に指導センターをあけてもらい、一足先に温まっておりました、すみま

現場位置確認

せん。。。。）

１４：３０頃

・西朋登高会のヒゲ、中間連絡地点に戻る。加藤、救助隊ルート、林道を告げる。ビバーク場所を撤収し救助隊を手伝うため滑落現場に移動。

１５：００頃

①後発の救助隊、警察が先に滑落場所に到着。

②先発の救助隊、警察は滑落場所を通り過す（林道は、滑落場所から更に下の沢伝い)。約１０分後に合流。

③救助担架（ソリ）を立ち木でビレーをとり、滑落者を救助担架に移動。足元を先頭にして搬送。

④救助隊情報

・救助隊は総勢１１名、警察は５名と聞いた。

・警察の後発隊３名は登山道を通らず林道を来たため、１時間近く到着が遅れたとのこと。

・救助隊の１名が左肩？を負傷し、救急車で病院へ行った。

１５：３０

①滑落者を搬送。救助隊、警察、確保･救護パーティの全員が下山。

②加藤、前線連絡班、村岡に下山報告。

１６：３０頃

①指導センターの服部、村岡と人見、加藤が合流し、救助本部のある旅館まで下山。

（指導センターの前線連絡班、服部、村岡は救助隊到着までの数時間、外で寒さをしのいでいたとのこと）

１７：３０頃

・大丸温泉発、帰京。

現場位置情報

（反省点：服部）

・滑落場所をおおよそで判断してしまったため、きちんと救助隊に伝えることができなかった。

・救助を要請する際、119 ではなく、管轄の警察へ連絡すること。

（これは、帰宅後服部氏より聞いた）

・救助隊は警察へ連絡すべきとのこと。また、単に 110 ではなく、所轄の連絡先を山行時に調べておき、そこへ連絡すると。

（余談：服部）

指導センター内で・・・・
事故のあった稜線はもっとも風の強い場所とのこと。また、1 月にも同じような場所で事故があり、その方は亡くなったとのこと。前日は天気がよく、登山日和で、今日みたいな天気の日は本当は登らない方がいいんだよ、とも。
救助隊の方は、12 時～12 時半ごろに救助要請の連絡を受けたようでみさなさん、昼食をとるかとらないかとい時間だったようで、昼も取らずに皆さん、駆けつけてくれていた感じでした。
また、若い警察官 3 名は午前中にアイゼンのつけ方を教わったばかりということと、夜勤明けだったのか睡眠は１～２時間だったらしいです。という話が聞けました。

（反省点：村岡）
・服部・村岡が指導センターまで降りる際、トレースが消えており、ルートが正しいか不安な場面があった。
・村岡携帯はすぐ電池切れとなってしまったため、携帯用充電器（電池）が装備にあるとよかった。
・メンバーの電話番号は携帯に登録しておくべき。加藤に連絡を取る際、登録していなかったため手間取った。強風で計画書を飛ばされでもしたらアウトだった。

（反省点など：加藤）
・リーダーが滑落者の確認でパーティから離れた場合などは、待機が基本であり、今回のような危険な状態の中での行動に慎重さが欠けた。また、状況を自己判断し、意見具申も必要。服部の判断に救われた。
・今回のような状況で自分が滑落し、北稜パーティの装備しかない場合、救助の時間から寒さで死んでいたのではないかと思いゾッとした。ザイルなど登攀用具はどこまで必要か。
・登攀技術を身につけることの必要性を感じた。
・ビバークの際のピッケルでの雪面の穴掘りは疲れた。ショベルの自己装備の必要性を感じた。

（下山後の経過：人見）
1　翌９日夕に山本氏から人見宅に電話連絡。「管間病院入院。肋骨やその他も骨折、背骨を検査中。大変感謝します」
2　１５日山本氏から人見に手紙。川崎氏は「鎖骨、肋骨。背骨骨折、右肺損傷ではございますが、本日現在の医師の診断では命には別状ないとの事でございます。皆さまには是非是非宜しくお伝えをお願い申し上げます」

以上